

設備・施設が文化資源と評価される企業のその活用へのプロセスと課題について

小笠原 伸（白鷗大学）
assamtea@fc.hakuoh.ac.jp

1. はじめに

企業には、その生産設備や施設が経年変化する中で文化的価値を評価され文化資源と理解されるようになるものを持つところがある。日本には創業100年を越えるいわゆる長寿企業も多数ある。自社の資源の中に優れた文化資源が存在していたり、設備・施設が他に無い希少性の高いものがある中で、その評価自体がなされていなかったり観点の相違により評価を適切に行うことが難しい状況が存在している。

設備・施設として稼働し日常の企業活動に含まれていながら、対外的にはその設備や施設が社会の貴重な文化資源として受け止められる場合、企業はそれをどう理解し自社内で扱い、活用してゆくのだろうか。

日本社会の成熟に伴い同様の事例は増加することが考えられるとともに、外部からの評価が企業活動の支障と受け止められると、最悪の場合には自社内でそれら資源を客観的な評価や保存・維持などの措置を講じる事無く取り壊しなどの処理を進められてしまう可能性もあり、その活用や評価の手法や事例の蓄積は必須でもある。

2. 水力発電所と水利施設を保有する事例

中部地方に所在する製造業大手企業の大正時代に建設された水力発電所と水利施設の事例を挙げる。当該企業は岐阜県大垣市に本社が所在し、高度な複層電子基板やセラミックス製品の製造などを扱う電気化学メーカー、イビデン株式会社である。同社設立の起源は揖斐川による水力発電と岐阜県西濃地方への配送電事業であった。揖斐川上流の山中に自社で建設した複数のダムや発電施設を有しており発電した電力

を大垣市内の工場まで送電し自社消費している。日本では戦時体制下で民間企業の保有していた発電施設の大半が接収されており、現在に至るまで民間企業で水力発電所を保有する企業は限られる。

その点で同社は現在も大正期に建設された自社堰堤と約8kmにおよぶトンネル等の水利施設、更に約96mの落差を利用した東横山水力発電所（1921年完成）などを保有している。

これらは同社の利用する電力を生み出す基幹的施設であるとともに、赤煉瓦造の東横山水力発電所建屋と、送電設備としての鉄塔の中には完成当時の大正時代に建てられたものも残り、これらの文化資源としての価値も十分に高いものであるといえる。



図 イビデン東横山発電所
(岐阜県揖斐川町)

3. その活用と課題

当初、地元自治体による児童の地域学習事業として、地域の歴史と文化を学ぶべく地元河川を活用した水車制作のワークショップを筆者ら大学研究者が開催していた。そこに同社から協

賛の申し出があり、その中で同社の歴史的にユニークでかつ地域社会を重視した経営姿勢を知ったことから、同社の保有する文化資源でのワークショップの開催を企画した経緯がある。

・企業側の対応とその活用に向けた大学による評価と活用方法の提案、NPOなどの協力

企業側では上記自社資源の評価があくまで生産設備であり、文化資源としての理解は社内でも様々なものであったと聞く。それは営利企業としては当然のことであり、むしろ低廉な費用で自社のエネルギーを生み出す設備であるという認識が強かった。企業側は自社の設備・施設が文化資源と評価されてもそれは理解の枠を超えている。またその際に自社の設備・施設が文化財としての評価をされると自社の事業への支障が出るのではないかと考えるのは当然でもあり、これをどう乗り越えるかは課題であった。

そこで大学側研究者が協力することにより、その保有する設備・施設の価値の説明を行いそれらの公開・活用の可能性を検討してゆくこととなった。地域に向けては地元企業にこのような文化資源が存在しておりそれを外部に示してゆくことでの内外への波及効果を示し理解を得ていった。

地域を知る、そして企業理念と歴史とを合わせて学ぶことは地域的な教育の観点から有意であるとともに、更に企業の将来的ビジョンも合わせ自社の理念を社内外に改めて周知してゆく効果について提案を行っていった。そして後には教育分野に関わる地元NPOの参加を要請し、外部の知見の活用を促していった。

・地域向け効果やストーリー構築の戦略、CSR事業としての可能性

企画としては地元小学生が揖斐川の水力発電から始まった同社の歴史を知り、川をめぐる文化とその意味を学び同社東横山水力発電所を見学し、その後水車を制作し揖斐川で実験をするという提案を行い実行に移された。

これは地域への社会貢献事業であるとともに社内外での人材育成事業としての意味もあり、長じては地元地域での将来的な人的資源の確保

という観点があった。社内でも発電会社としての歴史を知る人は多いとはいえ、自社の歴史の再発見という意味合いを持つようになるとともに、事業を継続すると地元小学生である参加者が同社への理解を深め長期的に同社との関わりを持って行くようになるということも示していた。

本事業は2012年の開催をもって終了となったが、この「水から学ぶイビデンツアー」については同社CSRレポートへ「当社の創業以来稼働している「東横山発電所」の見学をし、ものづくり体験を通して自然の力と電力について学ぶ1泊2日のツアーを、2010年より開催しています。地域の発展の歴史を学びながら、実際に水の力で発電する水車をつくることを通じて、親子でその仕組みや働きを学習します。2011年は、地域の小学生とその保護者を対象に行い、13組29名が参加し、91%のご家族から「満足」との評価をいただきました。」という記述がなされることとなった。水を活用し成長してきた同社の歴史を、地元の水を学び理解して活用するワークショップを行うことで実現することが可能になったものと受け止めている。

4. まとめ

企業が自社の資源についての適切な評価を行うに際して、自社では適切な判断が難しい場合に外部の視点を導入することでの自社資源の有効な活用につながり、社会貢献や社員教育などを通じて企業価値向上に繋がることが事例より明らかになった。事業の企画運営当初から本研究発表にご協力いただいたイビデン株式会社総務部社会貢献担当の皆様には御礼を申し上げます。

参考文献：

「イビデン70年史」イビデン株式会社、1982年
「イビデンCSRレポート2012」イビデン株式会社
<http://www.ibiden.co.jp/csr/report/pdf/report12.pdf>